



Don Quijote, Vol.48 montado en un avión

スペイン各地でのエピソード完

34歳で初めてスペイン語に取り組み

texto : Takeshi Shimizu

清水武 Takeshi Shimizu 旅行作家。
世界文学紀行を定年後のライフワークに作品の舞台を訪ねている。
東京都 昭島市在住
<http://homepage2.nifty.com/donky/>

これまでスペイン各地でのエピソードを紹介してきましたが、これらの地を訪れることになった動機は定年2年目のマラガ大学への留学でした。私は34歳でまったくゼロの状態からスペイン語に取り組みました。結果的にはその勉強が、中南米の特派員として派遣され、さらに高いレベルのスペイン語を目指す留学にまで繋がったのです。そこで、これから留学をされようとしている方、また、これから語学に本格的に取り組みようとしている方の少しでもお役に立つことができるならばと、いまだ未熟な自分の語学力を承知の上で、語学習得に関する私の体験をご紹介します。

大学(早稲田)時代の第二外国語はドイツ語でした。スペイン語については、大学を卒業してNHK学園高校の教諭を務め、その後、新聞社に入社してしばらくした頃、必要性を感じて独力で勉強を始めました。中南米関係の記事が増え始めていたのに、スペイン語のわかる人が社に誰もいなかったからです。一時は、スペイン語ができる人を探しては翻訳してもらったりしていましたが、「なんとか、ある程度のもものは自分でできるようにしたい」との思いから、決心し始めたことでした。

当時34歳。大学卒業後すでに十年近く経過、記憶力も下り坂になっている時です。皆さまもご存知のように、特にスペイン語は動詞の変化が難しい。そこで週2回2時間、スペイン語教室に通って文法を勉強の他、NHKのラジオ・テレビ講座、参考書による独習をしていました。ところが、10か月たった頃、急きょ、パナマに特派員が必要との状況が生じてきて、たまたま私がスペイン語をやっていたことから(むろん、他の要素からも検討されたと思いますが)派遣されることになったのです。

パナマに着いてから約1年間、仕事の合間をぬって現地のスペイン語教室に通いました。クラスの仲間にはアメリカ、カナダ、フランス、インド、中国とそれぞれパナマに駐在しているビジネスマンやその夫人たちでした。教材のテキストはすべて英語での解説。担当教師の説明も最初は英語、やがてスペイン語のみになりました。思えば、まがりなりにも
30 Tabi Tabi TOYO DIC2010

英語ができたのは、大きな救いだったといえます。その後、現地の機関紙編集の応援をする必要から、支局のすぐ近くにあったパナマ大学の新聞学科に聴講生として週1回2時間、1年間学びました。これは、編集のほかにもパナマの社会事情を知る上で役に立ちました。

語学は「やる気」と「根気」以外にない。さて、英語については、一般に日本人の読解力はレベルが高いのですが、問題は会話力です。現在、ラジオ・テレビの語学放送、テープ、語学学校、各種参考書、インターネットでと、巷には語学教材が氾濫。更には「××週間で話せる英会話」といったハウトゥーものも街にあふれています。しかし私の体験から言えることは、そんなに安易にことが運ぶことは決してありえない。語学は「やる気」と「根気」以外の何物でもない、ということですね。ちなみに、NHKの語学番組テキストの販売部数は、毎年4月を頂点にして、急下降のカーブを描いているといえます。

学問的なアドバイスはその道の専門家にお願いするとして、私は読解力のアップのために、電車・バスの中をはじめ、歩行中も英語のカセットテープを手放すことはありませんでした。誰も通らない路上では、耳か入った文を大きな声を出して再唱しました。長時間のイヤホンで時には耳が痛くなったり、同じことの繰り返しに飽きて、吐き気をもよおすことさえありました。でもともかくやりぬいた。一方、英語のテレビ番組、映画等、時間の許す限りそれらに映れ、そしてつかなだ結論は「語学に王道はない。ただ“やる気”と“根気のみ”ということでした。一生のうちのある期間、“これほどまでに集中したことはない”と思えるほどの努力が必要だと思います。英語圏の国に住んでいるからといって、決して自然に英語が上達するわけではない。本人に学習意欲と実践がない限り向上はありません。逆に日本の田舎にいても、本人に“やる気”さえあれば、語学上達の道はいくらでもあると思うのです。

ちなみに一太平洋戦争の開戦後までもなく、米海軍は全米の大学から知能指数の高い青年を集めて日本語の特訓をしました。猛烈な集中講義のおかげで、彼らはごく短期間で日本語の新聞を読み、草書も映画も理解できるようになった。二千人の卒業生の中には、ドナルド・キーンなど

多くの知日派や、日本との友好交流に深い繋がりを持つようになった人がいた。戦時中、「敵性語」として英語を排斥した日本がアメリカに勝てるわけはなかったのです。

定年からスペイン語の完成を目指す

ところで定年になつてなぜ今更スペイン留学を? 時間的に自由になった今、これまでの体験、積み重ねを最も効果的に生かし、スペイン語をもう一度系統立てて学びたい、との思いからでした。また「ドン・キホーテ」について本格的に取り組んでいくのに、スペイン語をもっと深めておく必要もありました。もちろん、原書は現代スペイン語とは異なり、とても難しいですが、ドン・キホーテが訪れた舞台を訪ね、地元の人々と交流、いろいろな話を聞きだすのに、言葉と共にスペインの文化事情や歴史を勉強しておくことも求められるからでした。留学の成果は、帰国後に自分のホームページにスペイン語欄も設けることができたところに表れています。ありがたいことだと思っています。

かつて、青年の育成に心血を注ぐ世界的な教育者から、語学の習得に關して、次のような励ましの言葉を聞いたことがあります。「使命を自覚したとき、才能の芽は急速に伸びることができる」。これは、未来を担う中・高校生に贈られたものですが、語学に限らず、また中高年の人にとっても当てはまると思っています。Nunca es tarde para aprender. いくつになっても挑戦の意欲こそ大切なのです。

以上、私の語学習得の体験を紹介してきましたが、メキシコでスペイン語の習得に励んでいらっしゃる皆様のなんらかのご参考になれば、こんな嬉しいことはありません。

